

P-81 SIADHを合併した原発性肺癌12例の検討

三重大学第3内科

○吉田正道、田口 修、山上知也、小林裕康、
ガバザ・エステバン、井端英憲、嶋 照夫

【目的と対象】SIADHの原因は多岐にわたるが、最も多いのが原発性肺癌、特に小細胞癌であるとされる。当科では1986-93年の8年間に201例の原発性肺癌症例を経験した。そのうちSIADH合併症例について、発症頻度、患者背景、組織型、化学療法との関係等について検討した。

【結果】SIADH合併肺癌は201例中12例(5.9%)で平均年齢64.5歳、1例を除き男性だった。組織別では小細胞癌が42例中9例(21%)と最も多く、腺癌が75例中1例、扁平上皮癌が67例中1例、大細胞癌が9例中1例だった。臨床病期はII期1例、IIIA期2例、IIIB期6例、IV期3例と進行例が多かった。検査成績(平均値)では血清Na最低値が120mEq/L、血中ADHが6.1pg/mlだった。

【考案】小細胞癌は異所性ADH産生腫瘍として有名であり、9例中7例はそれによるものと考えられ、2例は経過より化学療法剤(シスプラチンまたはビンデシン)による薬剤性が疑われた。非小細胞癌症例のうち扁平上皮癌症例は気胸を契機に、大細胞癌症例は放射線肺炎を契機に発症した。腺癌症例の原因は経過より薬剤性が疑われた。

P-83

ヒト型抗扁平上皮癌抗体の反応特異性の検討

慶應義塾大学医学部外科

○江口圭介、成毛聖夫、山畑 健、泉陽太郎、澤藤 誠、
川村雅文、加藤良一、菊池功次、小林紘一

【目的】治療および診断への応用に関して、マウス型の抗体よりも人体投与に有利な特性をもつ、ヒト型抗扁平上皮癌抗体の組織特異性について検討した。

【方法・結果】多重免疫不全マウスを利用して製作されたヒト扁平上皮癌(肺癌)に対するヒト型モノクローナル抗体をFITCで標識化して使用した。当施設における肺癌切除例20例の凍結切片を蛍光抗体法(直接法)で染色した結果、扁平上皮癌および小細胞癌に特異的な反応が認められた。また切除標本を細切しエタノール固定した細胞浮遊液を使用しても同様の結果が得られた。喀痰細胞診陽性の癌患者、非癌患者、および健常人の計20人の喀痰を3日間、保存液(メタノール、チモール含有)を用いて蓄痰した材量でも、炎症性疾患の喀痰には反応せず、扁平上皮癌、小細胞癌の直接塗抹法の陽性例に反応が認められた。

【結語】本抗体の反応特異性では、肺癌の扁平上皮癌と小細胞癌に特異的な反応を示した。診断や治療に対する応用への可能性が示唆された。

P-82 肺癌組織におけるthymidine phosphorylaseの発現に関する免疫組織学的検討

浜松医科大学第一外科、日本ロシユ研究所*

豊田 太、鈴木一也、野木村宏、影山善彦、原田幸雄、
松本武久*

【目的】腫瘍組織においてthymidine phosphorylase(以下TdR Paseと略す)活性の高いことは、以前より報告されている。今回、肺癌組織におけるTdR Paseの発現性を免疫組織学的に検討した。【対象と方法】ホルマリン固定パラフィン包埋された肺癌組織54例(腺癌21、扁平上皮癌13、腺扁平上皮癌8、大細胞癌5、小細胞癌5、カルチノイド2)を対象とした。一次抗体としては、日本ロシユ研究所より提供されたウサギ抗ヒトTdR Pase抗血清を使用し、SAB(Streptavidin-Biotin)法に準じて免疫染色を行った。染色性の程度は、(-)~(+++)で評価し、正常部および腫瘍部における組織内分布や組織型別の染色性の違いなどにつき検討した。【結果】正常部では、主に肺マクロファージに強い染色性がみられた。多くの肺癌組織において、腫瘍部に強い染色性が認められたが、組織型により染色の程度や分布に違いがみられた。腺癌では、(-)6、(+)11、(++)3、(+++)1で、特に周囲の乳頭状発育部に強い染色性があった。他の非小細胞癌、カルチノイドでも腺癌類似の染色程度であったが、小細胞癌では、(-)4、(+)1と染色性が低かった。【結語】正常肺で高いとされるTdR Pase活性はマクロファージに由来すると考えられた。また、肺癌の組織型の違い、特に小、非小細胞の違いにより染色性に興味ある所見がえられた。

P-84 非切除非小細胞肺癌NSE高値例の臨床的検討

国立療養所道北病院内科

○辻 忠克、高橋 啓、藤田結花、松本博之、
藤兼俊明、清水哲雄

【目的】血清NSE値が高値を示す非小細胞肺癌(NSCLC)は、化学療法に対して高い感受性を有する一方で、予後が不良であるとも報告されている。今回、非切除例におけるNSE高値症例の臨床像を、非高値例と比較検討した。

【対象と方法】対象は1990年1月より1992年12月の間当院に入院した非切除NSCLC症例107例である。組織型は扁平上皮癌36例、腺癌67例、大細胞癌4例である。病期は0期1例、I期6例、II期2例、IIIA期25例、IIIB期28例、IV期45例であった。血清NSE値はRIA法にて測定し、10ng/mlをcut off値とした。

【結果】血清NSE値が高値を示した症例は18例(扁平上皮癌8例、腺癌10例)であり、より進行した症例が多かった。化学療法が施行された症例の奏効率では高値例、非高値例で差を認めなかった。生存期間では、中央値は有意な差を認めなかったが、1年以上の生存者は非高値例で有意に多かった。しかし、IIIB、IV期で比較すると差を認めなかった。

【まとめ】血清NSE高値症例は進行期症例が多く、全体として予後は不良である。